



Title	関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第7弾 「Health For All: 平和と紛争・戦争」 第3回：「戦争と平和」平和を考える(2023年秋のグローバルカフェ)
Author(s)	安田, 直史
Citation	目で見えるWHO. 2024, 87, p. 30-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第7弾 「Health For All: 平和と紛争・戦争」 第3回: 「戦争と平和」を考える (2023年秋のグローバルカフェ)



近畿大学社会連携推進センター

安田 直史

もともとは外科医として国際協力を志したが、公衆衛生的アプローチの大切さに気づき転向。UNICEF職員として母子保健、HIVなどに取り組んできた。

COVID-19 によってオンライン化を余儀なくされてきた関西グローバルヘルスの集い (KGH) は今回グローバルカフェという形で完全対面開催を再開することができました。今回は「Health For All: 平和と紛争・戦争」の3回シリーズとして、第1、2回はオンラインセミナー形式で開催され、それを踏まえて第3回は対面でじっくり議論を交わそうという組み立てでした。会場である大阪本町のサラヤメディカルトレーニングセンターには20代の若者から70代の方までの多様な16人が集まりました。ありがたいことに、佐賀県や石川県という遠方からも参加していただき、このことから対面セミナーに対するニーズと渴きを実感しました。

まず日本 WHO 協会の中村安秀理事長が「戦争と平和と健康」というタイトルで場の設定と問題提起をされました(写真1)。1991年の湾岸戦争時に自身がトルコのイラク難民に対する緊急医療支援を行った経験から、この問題を考える場を設定されました。1948年に発効したWHO憲章ではその前文で「世界中すべての人々が健康であることは、平和と安全を達成するための基礎」と謳われており、まさに健康は平和の礎であることが明記されています。さらに1978年のアルマアタ宣言は「独立、平和、緊張緩和、軍縮などの真摯な政策はそのための(世界のすべての人々の健康水準を引き上げるための)資源を生み出します」とまで踏み込んだ公的文書です。2023

年の世界保健デーのテーマ「すべての人に健康を」はまさにWHOの根本理念であり、WHO設立当初から「平和への希求」を続けている様子が紹介されました。

続いて京都精華大学特任准教授のナンミャケーカインさんに「日本の難民受け入れとミャンマー情勢—2021年以降を中心として—」というタイトルでご講演をいただきました(写真2)。ミャンマーにおける紛争・内戦の現状について、また日本にいるミャンマー人の事例を通じて紛争・戦争を抱える国からの避難者に対して日本がどう対応するべきかという問題が提起されました。ご存知のように日本は世界的に見ても難民認定率が極めて低い国ですが、その反面、「人道的配慮」により在留が許可されている人が多いという、よくわからない制度を持った不思議な国です。クーデターの後ミャンマー人の申請が増えるとともに、法務省から「在留ミャンマー人への緊急避難措置」が発表されて、在留者が増えています。またミャンマー国内では一般市民が軍の暴力に対して「市民的不服従運動(CDM)」を展開し、医師、看護師、教師、エンジニア等が政府系機関での職務をボイコットし、政府系企業の製品をボイコットしたりして明確な意思を示しています。しかし武器を持っている人たちが攻撃してきた場合、武器を持たない一般市民は果たしてどう対したらいいのだろうか



写真1 中村安秀さんの講演



写真2 ナンミャケーカインさんの講演



写真3 グループでの議論の様子



写真4 グループ別発表の様子

か、という難しい問題を提起されました。

お二人の話題提供を受けた後、3グループに分かれて「(1) 紛争が起きた場合、保健医療者はどのような行動をとるべきか? (2) 紛争・戦争を起こさないために」という問いについて意見が交わされました(写真3)。あるグループは「当事者性」に注目し、当事者である場合と当事者でない場合でその対応が違うのではないかと、第三国での医療支援と紛争現場での医療は違うだろうという意見とともに、医療者が武器を持つことは自己矛盾であることなどが議論されたり、食の確保が大切であるなどの意見も出されました。

別のグループは外国から攻撃を受ける場合と、自国が軍国化して戦争を始める場合では対応が異なるのではないかとという視点で議論しました。前者ではすべてを尽くし、ボランティアの支援も借りて現行の医療を継続することが医療者の使命であること、また後者では反対運動、ボイコットなど反戦の声をあげることが必要であろうことが報告されました。しかし戦場で敵味方隔てずに治療するという赤十字の精神を実行できるか、との問いかけがありました。

最後のグループからは、医療者の強みを利用し、オピニオンリーダーとして勇気をもって声を上げる必要性が強調されました。まさにミャンマーでは医療者が率先してCDMを行っています。さらに

戦争を起こさないために「如己愛人(己の如く隣人を愛せよ)」という永井隆博士(1908-1951)のことが紹介され、この精神が重要ではないかと提起されました。

その後の討論では、世界の紛争に対していかに他人事ではなく、自分事ととらえられるか、また医療者として中立性をどうとらえるかという議論になりました。また医療者にとってプロフェッショナルとしての職業倫理的には敵味方に関わらず、負傷者を治療すべきであるとされる反面、その兵士が自らの愛する家族を殺害した者である場合、果たしてその様な対応ができるであろうか、という厳しい問いかけがなされ、率直な意見交換がさ

れました。簡単なまとめとしては、今世界の各地で増加している紛争は決して他人事ではないと認識すること、特に私たちが(医療従事者であっても、そうでなくても)取るべき行動について真剣に考えること、そして決して戦争を起こさないために予防行動を起こす必要があること、ということであったと思います。

やはりお互いの顔つきを見て、息遣いや雰囲気という同じ空間を共有しながら違う意見を交換するというオンラインでは味わえない楽しさがあることを実感できました。運営委員一同、世代を超えて意見の交換ができるこのような機会を今後も提供していきたいとの思いを強くしました。



写真5 集合写真